

まちを支えた偉人のはなし

The Story of a Great Town Benefactor



図書館蔵 安沢阿弥作



徳川家康の生母 於大の方

徳川家康の生母「於大の方」は、14歳のとき、岡崎城主松平広忠に嫁ぎ翌年竹千代（後の家康）を産みました。その後政略的に離別させられ、坂部城主久松俊勝に再嫁します。家康に対しては音信を絶やすことなく、心のこもる慰問の品を送り続け、少年期の家康の心の支えとなりました。また、家康が今川氏配下の武将として尾張に出陣のおり、坂部城に立ち寄り「於大の方」と再会を果たしたと伝えられています。

1600年（慶長5年）、関ヶ原の合戦で家康が勝利し天下の実権を握った2年後、1602年（慶長7年）8月28日京都伏見城で没しました。遺髪は洞雲院の墓所に分納されています。



有松絞りの創始者 竹田庄九郎

竹田庄九郎は阿久比庄出身といわれ、有松・鳴海絞りを全国に広めた立役者として知られています。江戸時代のはじめの有松は人家のない荒地で、尾張藩は集落を作るために住民を募ったところ、庄九郎を含めた8人が移り住みました。有松は丘陵地帯であるため稲作に適さず、鳴海宿に近いため宿としての発展も望めない中、名古屋城の築城の出稼ぎに従事していた庄九郎が、九州・豊後の国（現在の大分県を大部分に含む地域）から出稼ぎに来ていた人々が身に着けていた絞り染めの衣類をヒントに、知多木綿に絞り染めをし、街道沿いで土産品として売り出したのが始まりとされています。



● 知多四国八十八ヶ所を開いた 岡戸半蔵

1752年（宝暦2年）、福住に生まれました。中年になって一時に妻と子どもを亡くし途方に暮れ、近くの荒古の阿弥陀堂におこもりする日が続きました。亡くなった妻子の菩提をとむらうために、諸国巡礼の旅に出ました。

1819年（文政2年）に古見妙楽寺の亮山上人と出会い、知多四国霊場を開くことを決意して、田畠を売り払って資金を作りました。文政6年に、四国の武田安兵衛が加わり、3人で札所勧誘のため、霊場となる寺々へ向かいました。1824年（文政7年）88か所の制定を完了し、弘法大師像の開眼供養をしました。この年、古布村（美浜町）誓海寺で亡くなりました。

町内の知多四国八十八ヶ所の札所は、13番板山安楽寺・14番福住興昌寺・15番坂部洞雲院・16番椋岡平泉寺・17番高岡観音寺があります。



● 激動の時代明治期に活躍した 端山忠左衛門

端山忠左衛門は、阿久比の植村で育ち、県会議員や国会議員を務めるとともに、産業振興にも携わりました。35歳の時に初代愛知県会議員として知多郡から選出されました。40歳の時に再度県会議員に当選し、その後、南設楽郡長を命ぜられ、後に八名郡長も兼任しました。

1890年（明治23年）、46歳の時に日本で初めての国会が開かれることになり、第1回衆議院選挙に立候補して当選し、阿久比町として第一号の代議士となりました。伊藤博文とも交友があり、大成会の組織に尽力しました。翌年は、濃尾地震のため損壊した犬山城（当時愛知県公園）の復興に尽力し、その後、県会議員や、愛知県地方森林会議員、愛知県沿海漁業組合の頭取となり、業界の発展に寄与しました。

39歳の時に東海新聞を発行したほか、56歳の時に知多紡績株式会社を設立し、自ら専務取締役に就任、経営にあたりました。1915年（大正4年）、阿久比の植村で71歳の生涯を閉じ、葬儀は植大の蓮慶寺で盛大に行われました。端山の三回忌を迎えるに当たり、端山の功績を称え、慕う人々の寄進によって石碑が建てされました。（石碑は植地区の神明社の裏にあります）



● 都築育英会を設立した 都築良平

1908年（明治41年）阿久比村植大2番戸に、都築吉太郎の6男として生まれました。大正13年3月に半田中学校（現在の半田高校）を卒業し、昭和3年に家業である「マルツ織布」を継ぎましたが、経済不況と社会不安の中で倒産の危機にたたされます。しかし、銀行から融資を受けて輸出向け織機へと転換し、危機を乗り越えました。昭和23年には都築紡績と社名を改め、その後海外進出をはじめ、娯楽施設・ホテル・飲食店など経営の多角化を進めていきました。

また、昭和26年には行政に寄附を行い、村当局は村費1,000万円を追加し、合計1,500万円で4小学校の体育館が新設されました。加えて、昭和32年にも寄附を行い、寄附金を主体に町立公民館（後の中央公民館南館。現在は解体され役場庁舎が立地。）が建設されました。当時、知多半島唯一のもので、町民から「文化センター」の愛称で呼ばれ、文化活動などに使用されました。



そして、「社会に役立つ人になってほしい」との願いから昭和35年には都築育英会を設置し、大学進学者に返済不用の奨学金を支給し勉学に励む学生を支援しました。

「当世は人がすべてである。資金はあっても人と技術がなければ何もできない時代だ」と主張し、自ら技術開発に取り組み減量経営が叫ばれているときでさえ、必要な部分は減量するが、基本的には積極的な経営姿勢が業界から「怪物」とか「異端児」と呼ばれた理由かもしれません。

昭和57年7月17日に74歳で亡くなり、勤労福祉センター（エスペランス丸山）入口付近に銅像が建てられています。